童話集

白いおうむの森

安房直子

え・赤星亮衛

913.6 / 童話集白いおうむの森

206 pp / 22 cm / A 5 判変型

作者紹介　安房直子，本名峰岸直子。1943年，東京生まれ。日本女子大学国文科卒業，山室静氏に師事，同人誌『海賊』を中心に作品を発表。1970年，日本児童文学者協会新人賞受賞。1973年，小学館文学賞受賞。
著　書　『まほうをかけられた舌』（岩崎書店）『北風のわすれたハンカチ』（旺文社）『風と木の歌』（実業之日本社）『ハンカチの上の花畑』（あかね書房）

1973年11月10日　第1刷発行

著　者　安房直子（あわ なおこ）
装　画　赤星亮衛（あかぼし りょうえい）
発行者　井上達三（いのうえ たつぞう）
発行所　筑摩書房（ちくま しょぼう）
東京都千代田区神田小川町2-8
〒101-91　TEL03-291-7651
振替　東京4123

明和印刷　矢嶋製本

©1973

8093-88008-4604

童話集

白いおうむの森

筑摩書房

この森の木に止まっている
白いおうむの一羽一羽、
それは
別の世界からの
ふしぎなたよりなのです

安房直子

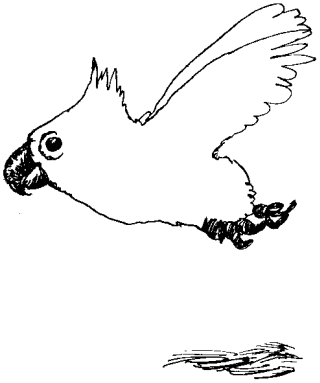
童話集 白いおうむの森

雪窓……5

白いおうむの森……35

鶴の家……69

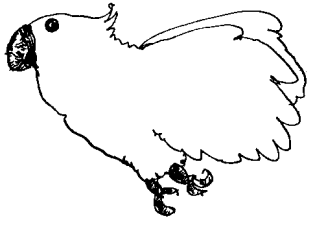
野ばらの帽子……89



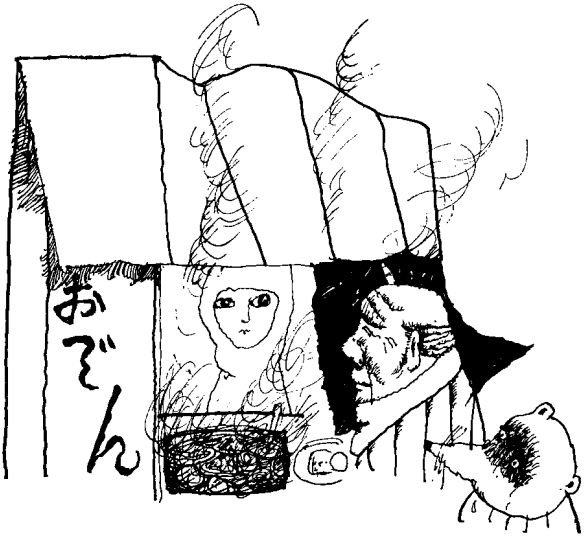
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てまり……119
長い灰色のスカート……143
野の音……169

装画・さし絵　赤星亮衛



雪窓（ゆきまど）



1

山のふもとの村に、おでんの屋台が出ました。

ぽっとあかりのともった四角い窓の中には、はちまきをしたおやじさんが、あいそよく笑っています。『おでん・雪窓』と書かれたのれんが、ぴらぴら風にゆれています。

「雪窓ってのは、店の名まえかね」

お客のひとりが、たずねました。

「まあそんなもんです」

からしを練りながら、おやじさんは、答えました。

「ふうん。しかし、雪もふらないうちから雪窓ってのは、どういうのかね」

「それでも、おでんは、冬のものですから」

おやじさんは、そう言ってから、この答えは、少しとんちんかんだったかなと思いました。

山の冬は早いのです。

はじめて雪がふって、あたりが、うっすらと白くなった晩、峠の方から、厚いコートのお客がひとり、ころがるように、屋台にやって来ました。

「さむさむさむ」と、お客は言いました。それから、両手をこすりながら、

「三角のぷるぷるっとしたやつください」

と、注文しました。

「三角のぷるぷる？」

おやじさんが、ひょっと顔を上げますと、これはなんと、たぬきです。目玉は、まん丸で、しっぽは、上等の大筆みたいに、ふっさりしているのです。けれど、そんなことでおやじさんは、おどろいたりはしません。山には、てんぐだって鬼だって、ひとつ目だって、それから、もっともっとふしぎなものが、どっさりいることを、昔から聞いていましたから。そこで、おやじさんは、まじめな顔で、

「何がほしいって？」

とたずねました。するとたぬきは、おなべの中をのぞきこんで、

「ほら、それそれ、三角のそれ」

と、言いました。

「なんだ、こんにゃくか」

おやじさんは、吹き出しそうになりながら、こんにゃくを、お皿にとって、からしをたっぷりそえてやりました。するとたぬきは、上きげんでしゃべります。

「おでんの店はいいですねえ。それに雪窓だなんて、ほんとにすてきな名まえなんだから。ぼくは、もう、すっかり感心しちゃって」

「気に入ったかい」

「気に入りましたとも。雪げしきの中に、屋台のあかりだけが、うかび上がって見えるんだもの。その窓の中で、ゆげがあがって、おもしろそうな笑い声なんかして……ぼくも一回、雪窓のお客になってみたいと思ってました」

これを聞いて、おやじさんは、すっかりうれしくなりました。たぬきは、こんにゃくをぱくりと食べると、

「おでんの煮方は、むずかしいですかね」

と、たずねました。

「ああ、むずかしいね」

「何年ぐらい、修業がいりますかね」

「わしは、ちょうど十年だ」

「十年！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たぬきは、ぶるぶるっと頭をふって、
「たぬきの寿命より長いじゃないか」と、さけびました。

それから、たぬきは、毎晩やって来たのです。そして、そのたびに、おでんのことを、あれこれたずねるものですから、ある晩、おやじさんは、思い切って、こう言いました。
「おまえさん、うちの助手になるかい」
「じょしゅと言いますと?」
「仕事の手伝いをするのさ。火をおこしたり、水をくんで来たり、かつおぶしをけずったりするのさ」
これを聞いて、たぬきは、踊りあがりました。
「ねがったりかなったりです。こんなにうれしいことはありません」
そう言うなり、たぬきは、さっさと屋台の中へはいりこんで来ました。そこで、おやじさんは、長いおはしで、おなべの中のものを、ひとつひとつつまみ上げて、ていねいに教えました。
「これ、だいこん

これ、キャベツ巻き
これ、ちくわ」
たぬきは、そのたびに、ふんふんとうなずきましたが、また、かたっぱしから忘れるのでした。

それでも、たぬきは、よく働いてくれたのです。とくに、さといもを洗うのなんか、うまいものでした。たぬきが来てからというもの、おやじさんの仕事は、ずいぶんらくになりましたし、家族がひとりできたようで、しあわせな気分にもなれるのでした。
それまで、おやじさんは、ひとりぼっちでしたから。だいぶ昔に、おかみさんをなくし、少し昔に、おさないむすめをなくしました。むすめの名まえは、美代といいました。小雪の舞う晩なんかに、よくおやじさんは、遠い空の方から、美代の泣き声が、うわーんと、わいてくるような気がするのです。お客が、みんな帰ってしまって、屋台のあかりを消すとき、ひとりぼっちのおやじさんは、いちばん、さびしいと思うのでした。
ところが、たぬきが来てから、あかりを消す前は、かえって、ゆかいなひとときになりました。お客が帰ってしまうと、たぬきは、コップをふたつ、かちんとならべて、

「さあ、おやじさん、酒もりしましょう」
と、言うのでしたから。お酒をのみながら、たぬきは、おもしろい話をしてくれましたし、歌も歌ってくれました。すると、おやじさんは、すっかり気分が良くなって、世の中が、ひとまわりも、ふたまわりも、広がったような気になるのでした。

2

さて、雪がどっさり積もったある晩のこと。
やっぱり、あかりを消す前に、たぬきは、かちんと、コップをならべました。ところが、このとき、外で、
「もうひと皿ください」という声がしました。まだひとり、お客が残っていたのです。
「や、とんだ失礼を」
そう言って、おやじさんが、よくよくながめると、女のお客でした。かくまきを、頭からすっぽりかぶって、まるで、雪のかげのように、ひっそりとすわっていたのです。それにしても、こんな時刻に、女の人が、おでんの屋台にいるなんて、少し妙じゃありませんか。
「もし」と、おやじさんは、声をかけました。すると、お客は、顔を上げて、にっこり笑い

ました。まだ若いむすめでした。えくぼがふたつ、ぽくっとよりました。このとき、おやじさんは、はっとしました。その顔は、どことなく、美代ににていましたから。おやじさんは、まじまじと、むすめの顔を見つめて、それから、心の中で、美代が死んでからの年月を、こっそり数えてみました。

（生きてりゃ、十六だ）

そう思って見ると、かくまきのむすめは、ちょうど、十六ぐらいでした。

「あんた、どこから来なすった」

おそるおそる、おやじさんは、たずねました。すると、むすめは、すきとおった声で、

「峠をこえて来ました」と、言いました。

おやじさんは、仰天しました。この雪の中を、山ひとつこえるのは、たいへんなことですから。男の足だって、まる一日はかかるでしょう。

「ほんとかね。山のむこうは、野沢村だよ。あそこから来たのかね」

おやじさんは、念をおすように、たずねました。

「はい、野沢村から来ました」と、むすめは、答えました。

「どうしてそんな遠くから」

すると、むすめは、にっこり笑って、

「雪窓のおでんが食べたくて」
と、言ったのです。
「そりゃまた、ごくろうな……」
おやじさんは、急にうれしくなって、ほくほくと笑いました。
「それじゃ、あんたは、野沢村の人かね」
むすめは、何も答えず、ほそい目で笑いました。見れば見るほど、美代によくにていると、おやじさんは、思いました。
このとき、たぬきは、屋台の奥に、じっとすわっていましたが、ふと、たぬきのかんで、こう思いました。
(ありゃもしかしたら、雪女じゃないだろうか)
そういえば、色が白くて、ほほのあたりだけ、ほんのりと桃色なのです。たぬきは、昔、山で見た雪女のことを思い出しました。
まだ子だぬきのころ、母さんと、穴にもぐっていたら、まっ白いすあしが、穴の前を、すうっと通ったのです。子だぬきは、思わず、穴から首を出そうとしました。すると、母さんだぬきが、
「およし」と、止めたのです。

「あれは、雪女の足だよ。外に出ちゃいけないよ。雪女につかまったらさいご、こごえてしまうんだから」

そんなわけで、たぬきは、雪女の足しか見なかったのですが、あのときのすあしと、このむすめの顔とは、なんだか、つながっているような気がしました。たぬきは、おやじさんの背中を、トントンたたいて、ささやきました。

「おやじさん、それは、雪女ですよ。雪女につかまったら、こごえてしまいますよ」

けれど、おやじさんは、ふりむきもしませんでした。むすめが、おいしそうにおでんを食べるのを、ただもう、うれしそうに見ているのでした。おでんをきれいに食べおわると、むすめは、立ち上がりました。

「もう、帰るのかい」

なごりおしそうに、おやじさんは、むすめを見つめました。むすめは、

「また来ます」と、言いました。

「おお、そうかい。また来てくれるかい」

おやじさんは、幾度もうなずきました。

「気をつけて帰るんだよ。かぜ、ひくんじゃないぞ。またおいでよ」

かくまきのうしろ姿にむかって、おやじさんは、幾度も、またおいでよ、またおいでよと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com